

旧洪徳寺墓地石塔群調査報告

2023年1月30日 佐世保史談会 垣田鉄郎

と き：2023年1月16日(月)

メンバー：石塔研究家の大石先生／田平の郷土史家・山下さん／佐世保史談会・垣田
／石塔群の場所を教えてくださいました洪徳寺檀家でもある山口さん 以上4名

2020年2月9日に初めて山口さんに同地を案内してもらった時は倒木を薙ぎ払いながら進みたどり着いた墓地は長年放置されている状態で荒れ果てていた。

洪徳寺が現在の場所へ移されたのは明治5年のことで、新田から遷ってきていた竹林寺を合祀して建てられた。その後ときが経ち墓地は洪徳寺の預かりではなくなり、人も寄りつかなくなり老廃していった。墓石群にはもう魂が入っていないとの事のようにだが、近年山口さん他、檀家の方々の熱意で周辺が整備された。

今回は私の念願であった大石先生にご同行をお願い入れ、快く承諾して下さったので、自分にとっては貴重な体験であり、ご指導していただきながらの調査となった。

途中にある飯盛権現跡地を調べた。飯盛権現は元々は小野町にあった熊野権現(現・熊野神社)が天正8年(1580)にこの地に移され飯盛権現と称した。飯盛山の麓を流れる相浦川の飛び石から表坂(鳥居坂)を登った突き当たりの台地にある。飯盛権現から飯盛神社と称するようになったのは明治4年(1871)の事で、明治39年(1906)に現在地に遷された。

飯盛権現跡地からは近世江戸期の肥前狛犬や鳥居に架けられていた扁額などが確認できた。土砂で埋まっている石造物がまだ他にもある可能性がある。

① 飯盛権現跡地



肥前狛犬

- 口の部分と足の一部が欠けている
- 本来の形態は足が直立している。
- 近世江戸期のもの
- 田舎廻によると「飯盛権現には宝殿拝殿があり宝殿の左右に高麗犬があった」とされる。元々は宝殿の中に安置されており、二体あったと思われる。(現在は一体しか確認できず)

扁額の発見

- 土砂に半分埋もれた扁額を発見する
- 洗って文字を確認すると飯盛大権現と彫られていた
- 大権現ということは明治以前の江戸時代の物である。
- この扁額の大きさからして鳥居もある程度大きかった
- 田舎廻によると飯盛権現には「川端に一の鳥居あり、そこより式三丁登りて二の鳥居あり」とされる。現在の飯盛神社の二の鳥居がそのどちらかだと思われる
- 橋本智氏が作成した相浦町史跡案内マップには「門前の飯盛神社が現在の場所に遷宮された際に鳥居も移築され、代官の名前や東漸寺の銘もある」と記載されている。

※1丁=約110m

[肥前狛犬]

佐賀県と福岡県、長崎県、熊本県の一部に分布しており、安土桃山時代から江戸時代中期にかけて造られ神社などに設置された。30cm前後の小型で素朴な体形をしている。

阿吽(あうん)のつがいで、口を少し開いているのが阿形(あぎょう)で口を閉じているのが吽形(うんぎょう)

②飯盛権現跡地から北東にある石棺墓

飯盛権現から旧洪徳寺墓地へ向かう北側の斜面。大雨時の濁流でできた道を登っている途中、左手にある石棺墓を調査。

半壊状態ではあったが普通は目にする事がない石棺の中の真砂石を確認。年号も判明できた。しかしこの状態で放置せざる得ないのは心苦しい感もある。



- 前面の蓋が外れ、中のものが飛び出している状態
- 石棺の中に詰められていた真砂石の状態を確認できるのは稀であり希少

蓋

※真砂石はそのひとつひとつが祖霊を意味する



- 3年前の2020年2月9日に撮った写真。
この時は請花(うけばな)の上に石仏が乗せられていた。
この形が正解とのこと。



- 基礎の側面に元禄三年六月と見える

※元禄三年=1690年



性質が違う石

現在の様子。
右は請花(うけばな)の上に乗せられていた石仏(半壊)
真ん中の石柱。使用用途は不明だが他と同じ性質の石なのでこの石棺に関連するものと思われる。
左のホゾが見えている石だけは性質が違う。石棺墓と関連性がないと思われる。

※ホゾ=出っ張り部分。台石に差し込んで据え付ける。



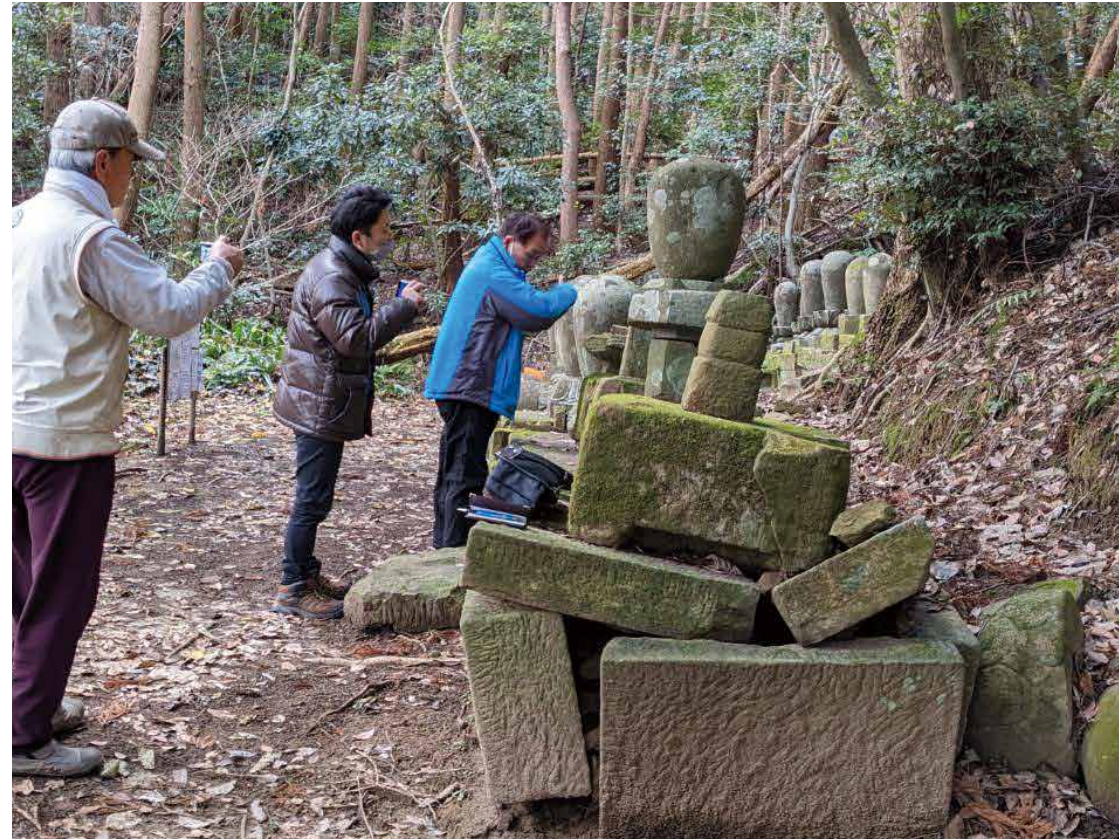
- 基礎の前面に何か彫られているが解読できず。
おそらくは数名の法名が彫られていると思われる

③旧洪徳寺墓地石塔群

石棺墓から斜面を30m程登ったところに作られた台地に旧洪徳寺墓地はある。

苔むした基壇の上に古い無縫塔が整然と並んでいる。3年前に来た時より整備され看板まで建てられていた。山口さんをはじめとする地元の方々のおかげでスムーズに調査することができた。

一帯の墓石群は宗教関係者の埋葬墓地として確認できる。大石先生も驚かれるような希少な石塔の発見もあり、引き続き調査が必要で、できることなら図面におとして記録することが望まれる。



◎墓石群の中で最も年代の古いと思われる希少な石塔

一石五輪塔

- 緑色片岩
- 九州では少なく希少
- おそらく県内では2例目
- 1500年代
- 基礎部には当時の銘が彫られている

おうほうきんこうぜんものため
為王峰金公禅門



中世の無縫塔(卵塔)

- 緑色片岩としての事例は希少
- おそらく県内では5例目、完形塔としては県内3例目に値する
- 中台部分が逆さま
- 元々この地にあったものか、移設されてきた可能性あり



◎1500年代末から江戸初期に作られたと思われる砂岩を使用した石塔



無縫塔

- 1600年前後
- 砂岩
- 八世と彫られている



宝篋印塔の塔身と基礎

- 江戸初期／砂岩
- ※緑色片岩で一段の場合は五輪塔が多く、緑色片岩で二段の場合は宝篋印塔が多い。砂岩だと一段でも宝篋印塔の場合がある



五輪塔

- 1500年代末から江戸初期
- 砂岩



双仏石(逆修牌)

- 砂岩
- 夫婦で造っている
- ※逆修牌(生前に造る)。世情が混乱している時に造る傾向あり



単体仏(逆修牌)

- 左の双石仏よりも古い
- 砂岩

④慶安二年(1649)の供養塔

旧洪徳寺墓地石塔群から斜面を20m程登ったところに砂岩でできた大きな板碑を発見。 枡形に積み重ねた台座の上に高さ1.3mほどで幅も分厚い大きな砂岩がのっている。

深く刻み込まれた月輪の下部に男女の名前。中央に仏語が刻まれている。左端には慶安二年十二月に建立とある。

砂岩製ではあるが370年あまりの風化を感じさせず文字もはっきりと読み取れる。

なぜ旧洪徳寺墓地の頭上にこの供養塔があるのか、この男女が何かしらの理由で亡くなった時に建立されたものなのか、または男女の死後、供養のために子孫が建立したものなのか、これほどの規模の供養塔を造るこの男女はどのような人物だったのか、夫婦または兄妹もしくは他人だったのか、死因はなんだったのか、やはり2人同時期に亡くなったのだろうか、様々な疑問が残る供養塔である。



中央に刻まれた仏語

一切有為法如夢幻泡影如露亦如電 応作如是観
(いっさいうゐのほうはむげんほうようのごとくしゆのごとくまたいなすまのごとくまたにかくのごときのかんをなすべし)

『金剛般若経』より出典されたもの

意味：この世の一切の事象は、夢のごとく、幻のごとく、泡のごとく、影のごとく、露のごとく、また電のごとくであるともよ



〈追記〉

供養塔より北東へ数メートル進んだところに4~5基の墓石を発見。残欠が散在した状態。側の慶安二年の供養塔や下段の旧洪徳寺墓地石塔群との関係性は不明。